様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４１７

研究課題名（和文）世界文学に見られる離散をめぐる、エクリチュールのあり方の統合的研究

研究課題名（英文）An Integrating Study on the Writing of "Diaspora" in the World Literature

研究代表者
越川　芳明（YOSHIAKI, KOSHIKAWA）

明治大学・文学部・教授

研究者番号：４０１４３９５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　三人の研究者がそれぞれ違う言語圏に赴き「離散のエクリチュール」をめぐって研究者や思想家と意見の擦り合わせを行なった。Christine Ivanovic教授、Lydia Mischkulnigウィーン教授、Leopoldo Federmair教授を招き、国際シンポジウム”Creating the World Literature : Diaspora, Trans-ethnicity, and Language Struggle”を開催。英語による報告書をまとめた。「離散の歴史的な意味と言語的混淆特質」をめぐって多角的な視野から語り合い、「離散のエクリチュール」の更なる統合的検討をはかった。

研究成果の概要（英文）：All three researchers have visited different countries on the fieldwork—Cuba, Mexico, France and Austria—and exchanged academic ideas on the writing of “diaspora” with foreign researchers and philosophers. Then we have invited three foreign researchers for the international symposium on the writing on “diaspora” entitled “Creating the World Literature: Diaspora, Trans-ethnicity, and Language Struggle.” The invited researchers were Professor Christine Ivanovic from University of Vienna, Professor Lydia Mischkulnig from University of Applied Arts of Vienna, and Professor Leopoldo Federmair from Hiroshima University. We have modified our speech and added questions and answer for the English proceedings. Finally, we have comparatively and multilaterally examined and integrated our thoughts on the writing of “diaspora” from the perspective of historical implications and language hybridization.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：離散（ディアスポラ）　世界文学　サンテリア　ユダヤ思想　ドイツ語圏文学

1.　研究開始当初の背景
(1) 20 世紀末以来、難民化した少数民族が大国へ移動、移民する現象が目立つ。そうした少数民族の「離散」は、他文化への越境や混淆を通じて、どのような動的システムを形成し、また、それが移民を受け入れる側によってどのように表現・記述されているのか。『ブラック・アトランティック』（1993 年、ポール・ギルロイ)や『もう一つの言語』(1997 年、アルフレッド・アルテアーガ）などの著書に見られるように、グローバル時代の到来と共に、「離散」はユダヤ人だけではなく、新大陸に奴隷として「拉致」されたアフリカ人の末裔、19 世紀半ばに祖国を失ったメキシコ人にも応用され、「ブラック・ディアスポラ」や「チカーノ・ディアスポラ」など、新たな言語表現、文学・思想様式として議論されてきた。
(2) 昨今、日本でも楊逸（中国人）やシリン・ネザマディ（イラン人）が日本語で小説を書いて評価されている。こうした事象に関連して、世界各地で母国語以外の言語で表現する離散の文学・思想をめぐる議論が活発になってきている。また、離散の文学・思想をめぐる優れた先行研究として、『ディアスポラの力』(2002 年，ボヤーリン兄弟）や『反ユダヤ主義の歴史』(2005 年、レオン・ポリアコフ）をはじめ、多数挙げられるが、それらはあくまで個別研究である。

２．研究の目的
(1) 越境（ボーダー・クロッシング）や混淆（クレオール）の位相と複雑に作用しあい、グローバル時代の動的システムを形成している「離散」をめぐって、作家・思想家による「離散」のエクリチュールのあり方を比較検討する。 具体的には、まず「離散」という概念がそこから生まれたパレスチナ以外の土地で暮らすユダヤ人の「離散」をおさえる。その上で、ポストコロニアル時代にいち早く「離散」の定義を拡大解釈され応用されている「離散」のアフリカ人（新大陸およびカリブ海域)、「離散」のメキシコ人（米国)、「離散」のトルコ人（ドイツ）をケース・スタディの対象とし、フランス語、スペイン語、ドイツ語、英語など、複数の言語文化圏を横断的に考察する。
（２）それによって、「離散」がどのようにポストコロニアル時代の「世界文学」を形成しているか検証する。民族・国民国家文学という枠組みによって分断されている移民・難民の文学を「離散」（ディアスポラ）という共通の概念によって、ポストコロニアル「世界文学」の重要な位相として、統合的に位置づける。
(3) 日本では個々の外国文学の作家研究は高い水準を有しているが、「離散」の文学をめぐっての研究は進んでいるとは言えない。本研究では、共同研究の形を取ることによって、まず「離散」をテーマにした各国の現代文学の成果を集約し、さらに離散の概念を共有する。多文化主義の世界思想の動向に照らしながら英語圏、スペイン語圏、フランス語圏、ドイツ語圏など、複数の言語文化圏を横断的かつ脱領域的に考察する。

３．研究の方法
(1) 本研究「離散（ディアスポラ）の動的システムの自己表出（エクリチュール）をめぐる統合的研究」の意義を明らかにするために、研究代表者の指示による緊密な連携の下に共同研究を行う。研究方法としては、つぎの４つのステップを踏む。①資料収集と分析：離散のエクリチュールをめぐる資料を集め、分析を加える。②海外調査：各研究者による海外調査（資料収集、専門家との討議、作家とのインタビュー）③報告会:全員参加の研究発表の機会を毎年設けて、共同研究者間の意見交換を行う。また、離散をめぐる文学研究の専門家を招いて専門的知識の提供を受ける。

(2)平成 24 年度(初年度)は、基礎的な情報の収集および暫定的な「離散」の概念共通化をめざす。平成 25 年度（２年度目）の目標としては、平成 24 年度の文献調査で得られた知見をもとに、各研究者が現地調査(作家・思想家とのインタビュー、フィールド調査)を行なう。平成 26 年度（最終年度）は、統括的な検討をおこなう。①研究者の個別例の発表および比較検討を通じて、初年度に暫定的に共有した「離散」の概念を再度検討する。②シンポジウム形式の講演会「離散と文学・思想」（研究代表者越川を含む全員が発表を担当）を開催し、広く社会に知見を広める。多角的な視野でディアスポラを捉えるために、講演会には、ゲスト講師として、外国人の多言語使用の詩人や研究者を招聘し、講演だけではなく詩の朗読を通して、離散の生の声を日本の聴衆に届ける。④そのシンポジウム内容を整理して、冊子の報告書を作成する。

４．研究成果
(1) 初年度、研究代表者（越川芳明）と分担者２名（合田正人、土屋勝彦）はそれぞれ、調査の対象としている国の研究機関へ行き、資料収集を行ない、各自がその成果を所属する学会で発表したり、関連する雑誌などに論文を投稿したりし、その後、各自の知見を合同で発表し合い、それぞれの「離散」の概念を共有した。①越川芳明は、キューバでアフロ信仰の調査を行ない、アフリカ系キューバ人の離散にかんする資料を収集した。その上で、日本英文学会のシンポジウム「環大西洋圏の脱植民地詩学」で、詩人ニコラス・ギジェンがどのように「黒い離散」を捉えているかを発表した。また、雑誌『四重奏』で、キューバの「黒い離散」についての根源的な特徴とも言える言語クレオール性について二回にわたって論じた。②越川芳明は、米国シ

カゴ市ピルセン地区のチカーノコミュニティで、チカーノの離散の資料を収集し、日本ペンクラブ女性作家委員会主催のシンポジウム「報道されない女性虐殺―今、米墨国境地帯のマキラドーラで起こっていること」で、チカーノの「離散」について、ヒスパニック系女性の経済的、身体的、心理的、信仰的な観点から発表した。③分担者の合田正人は、パリのフランス国立図書館にて、ジャン・ポーランのマダガスカル滞在、哲学者ジャン・ヴァールとマルチニックの詩人・思想家エドゥアール・グリッサンの関係について調査し、ユダヤ系の「離散」に関する資料を収集し、他の研究者にその内容を報告した。④分担者の土屋勝彦は、ウィーンで越境作家たちと意見交換し、ウィーン大学図書館、国立図書館および文学館にて、ドイツ語圏文学の「離散」をめぐる資料を収集し、その後、ドイツ語圏越境作家を招待して、国際シンポジウム「文学における間文化性」を開催したり、大学紀要に複数の越境作家たちへのインタビュー（ドイツ語）を投稿したりして、アイデンティティ、異邦性、他者性、規範言語と逸脱など、ドイツ語圏文学の「離散のエクリチュール」をめぐる根源的な諸問題について知見を深めた。報告集「文学における間文化性―地域的、国民的、大陸的アイデンティティの諸相」として出版し、他の研究者に配布し、他の研究者も土屋の知見を共有した。

(2)２年度目は、各研究者が現地調査をおこない、現地の作家、研究者、思想家と意見の擦り合わせをした上で、「離散」の概念を再度検討するため、前倒しして、三名の外国人研究者を招聘して、国際シンポジウムを開催した。「離散の歴史的な意味と言語的混淆特質」をめぐって多角的な視野から語り合い、「離散のエクリチュール」について学術的な知見を深めた。私たちのほかに、参加した三名の外国籍の研究者とは、Christine Ivanovic ウィーン大教授、Lydia Mischkulnig ウィーン造形大教授、Leopoldo Federmair 広島大学教授)である。「離散のエクリチュール」をめぐるシンポジウムのタイトルは、”Creating the World Literature : Diaspora, Trans-ethnicity, and Language Struggle”（使用言語は英語）。年度末に、シンポジウムの内容を整理し、また会場での質疑応答を追加して、冊子による報告書をまとめた（発行は明治大学国際連携事務室／大学院事務室）。さらに、研究者個人として、①代表者越川芳明は、雑誌『四重奏』でキューバのアフロ儀式における言語（ヨルバ語とスペイン語）の混淆性がどのように「黒い離散のエクリチュール」に生きているか論じた。②分担者合田正人は、京都ユダヤ思想学会での発表、メルロ＝ポンティ・サークルでの講演、「ジャック・デリダ没後１０年記念シンポジウム」での講演、また雑誌論文や著書によって、ユダヤ系思想家の「離散をめぐるエクリチュール」の知見を深化させた。③分担者土屋勝彦は、複数の紀要論文にドイツ語圏作家のインタビューを載せることによって、ドイツ語圏作家の「離散をめぐるエクリチュール」の考察を深めた。

(3)最終年度は、二年度までの「離散のエクリチュール」をめぐる理解の深化を踏まえて、各研究者がさらに現地調査をおこなった。帰国後、各自の「離散（ディアスポラ）」をめぐる発表や論文を交換しあい、その比較検討を通じて、「離散のエクリチュール」の更なる刷新と統合をはかり、それぞれの論文や発表に反映させた。①代表者越川芳明は、ハバナでサンテリアの「イファ」占いと「エボ」の方法について調査をおこない、ハバナ大学文学部図書館でサンテリアについての資料収集をおこない、その上で、キューバの黒人文化における「離散のエクリチュール」や、「離散」のキューバ人の思想に関して、論文「幻のキューバ　サンティアゴのブルヘリア」、著書『あっけらかんの国キューバ　革命と宗教のあいだを旅して』を刊行し、それによって自分の知見を広く一般に公開した。②分担者合田正人は、パリのフランス国立図書館、カンヌの現代の記憶と出版会館文書館で文献調査をおこない、その上で、ユダヤ系思想家の「離散のエクリチュール」をめぐって、日本ベルクソンプロジェクトでの招聘講演や、論文「ミシェル・アンリにおけるスピノザの蝕」や著書『フラグメンテ』（法政大学出版局）などを世に問うた。③分担者土屋勝彦は、オーストリア文学協会で講演を行い、ドイツ語圏文学をめぐるシンポジウムを運営・司会したり、また論文を書いたりすることによって、ドイツ語圏文学における「離散のエクリチュール」に関して、インターカルチュラリティの側面から知見を世に広めた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　19　件）

① 越川芳明、前置きの多いアメリカ文化論（10）ガラ語のオペラ、辞書のほん、査読なし、No.16、2015、28-29

② 越川芳明、幻のキューバ　サンティアゴのブルヘリア（八）、四重奏、査読なし、8 号、2015、2-9

③ 越川芳明、幻のキューバ　サンティアゴのブルヘリア（九）、四重奏、査読なし、9 号、2015、2-9

④ 越川芳明、少女が不機嫌な表情を浮かべる理由『火の山のマリア』、すばる、査読なし、1 月号、2016、300-301

⑤ 合田正人、ミシェル・アンリにおけるスピノザの蝕、ミシェル・アンリ研究、査読あり、5 号、2015、15-28

⑥ 合田正人、「肉」と「器官なき身体」、メルロ＝ポンティ研究、査読あり、19 号、2015、70-84

⑦ 合田正人、ハンス・ヨナスの生命哲学と心身問題、京都ユダヤ思想、査読あり、6 号、2016、123-145

⑧ 土屋勝彦、Zur Literatur, Übersetzung, Zweisprachigkeit u. a. —Interview mit Terezia Mora—、名古屋学院大学論集（言語・文化篇）、査読あり、27 巻 2 号、2016、149-161

⑨ 越川芳明、幻のキューバ　サンティアゴのブルヘリア（六）、四重奏、査読なし、６号、2014、2-9

⑩ 越川芳明、幻のキューバ　サンティアゴのブルヘリア（七）、四重奏、査読なし、7 号、2014、2-9

⑪合田正人、レヴィナスとラカン　スピノザの徴しもとに、思想、査読あり、４月号、2014、288-308

⑫土屋勝彦、Fliegende“ Identitäten, Interkulturalität, Übersetzung und Japan-Motive—Gespräch mit Ilma Rakusa、 人間文化研究、査読あり、21 号、2014、61-68

⑬土屋勝彦、Interview mit Terezia Mora am 4.9.2012 (Zusammenfassung)、人間文化研究、査読あり、22 号、2014、149－151

⑭ 土屋勝彦、Identität, Authentizität, Erotismus, literarische Sprache... Gespräch mit Lydia Mischkulnig、人間文化研究、査読あり、23 号、2015、79－86

⑮越川芳明、幻のキューバ　サンティアゴのブルヘリア（四）、四重奏、査読なし、4 号、2013、2-10

⑯越川芳明、幻のキューバ　サンティアゴのブルヘリア（五）、四重奏、査読なし、５号、2013、2-10

⑰土屋勝彦、Interview mit Judith Brandner—Transnationale Literatur、 人間文化研究、査読あり、20号、2014、197–204

⑱土屋勝彦、Interview mit Petra Coronato—Recycling der Literatur in Berlin、人間文化研究、査読あり、20号、2014、205-208

⑲土屋勝彦、ドイツにおける文化財、文化遺産について－アスマンの『想起の空間』をもとに、人間文化研究所年報、査読あり、9号、2014、58–59

〔学会発表〕（計　15　件）

① 合田正人、日本ベルクソンプロジェクト Memory and History での招待講演、2015.12.10、法政大学

② 土屋勝彦、シンポジウム「越境文学から世界文学へ」、世界文学・語圏横断ネットワーク、2015.9.21、立命館大学衣笠キャンパス

③ 土屋勝彦、シンポジウム「文学はどこへ向かうのか－ドイツ語圏越境文学の諸相と可能性」、日本独文学会春期研究発表会、2015.5.31、武蔵大学

④ 土屋勝彦、Österreichische Autorinnen und Autoren in Japan、Österreichische Gesellschaft für Literatur in Wien、2015.5.12

⑤ 越川芳明、合田正人、土屋勝彦、国際シンポジウム「世界文学を創造する　ディアスポラ、トランスエスニシティ、言語葛藤」、2014.12.13、明治大学

⑥ 越川芳明、シンポジウム「訪玖研究者によるヘミングウェイ」日本ヘミングウェイ協会、2014.12.14、関西学院大

⑦ 合田正人、ハンス・ヨナスの生命哲学と心身問題、京都ユダヤ思想学会、2014.6.21、関西大学

⑧ 合田正人、招待講演：Eternel retour d’il y a, Colloque international de philosophie：le retour de la sagessse du

ciel sur la terre, le 10 juillet 2014, Sirel, Univ. de Toulouse II

⑨ 合田正人、招待講演：「肉」と「器官なき身体、メルロ＝ポンティサークル、2014.9.21、大阪大学

⑩ 合田正人、招待講演：縁から縁――ジャック・デリダとジル・ドゥルーズ、ジャック・デリダ没後 10 年記念シンポジウム、2014.11.25、早稲田大学

⑪ 越川芳明、シンポジウム「環大西洋圏の脱植民地詩学」、日本英文学会、2013.5.25、東北大学

⑫ 越川芳明、講演「カリブ海の音楽」市民大学講座、2013.11.14、四日市大学。

⑬ 越川芳明、シンポジウム「報道されない女性虐殺―今、米墨国境（マキラドーラ）地帯で起こっていること」、日本ペンクラブ女性作家委員会、2013.11.30、慶応大学

⑭ 合田正人、招待講演：「水の上を漂う」とはどういうことか、日本フランス語フランス文学会関東支部、2014.3.8、首都大学東京

⑮ 土屋勝彦、国際シンポジウム「文学における間文化性」、2013.11.2、名古屋市立大学

〔図書〕（計　8　件）

①越川芳明、猿江商会、あっけらかんの国キューバ、2016、220

②合田正人、法政大学出版局、フラグメンテ、2015、674

③越川芳明、合田正人、土屋勝彦、明治大学、報告書「Creating the World Literature：Diaspora, Trans-ethnicity, and Language Struggle」、2015.2.20、51

④合田正人、河出書房新社、思想史の名脇役たち、2014、288

⑤土屋勝彦、名古屋市立大学、報告集「文学における間文化性―地域的、国民的、大陸的アイデンティティの諸相」2014.3

⑥越川芳明、彩流社、壁の向こうの天使たち、2013、198

⑦合田正人、河出書房新社、幸福の文法、2013、268

⑧合田正人、PHP 研究所、田辺元とハイデガー、2013、313

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

越川芳明（KOSHIKAWA, Yoshiaki）
明治大学・文学部・教授
研究者番号：４０１４３９５３

(2)研究分担者

合田正人　(GODA, Masato)
明治大学・文学部・教授
研究者番号：６０１７０４４５

土屋勝彦（TSUCHIYA, Masahiko）
名古屋学院大学・国際文化学部・教授
研究者番号：９０１３５２７８

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：